

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」



特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「保護者の見方が変われば・・・」

学習・進路指導の参考資料のために心理検査の依頼を受けています。検査後、学校用と保護者用の2種類（時には本人用も）の報告書を作成して説明します。保護者には、子ども理解を促すために、検査時の様子、検査結果（発達水準、得意・不得意なこと、苦手さへの支援内容、最適な学習環境等）、最後に保護者へ勇気づけのメッセージを送っています。

○年長児の保護者へ

検査では頑張り表を活用したことで、見通しをもって取り組むことができました。頑張りや努力の過程を見える形で評価することで、子どもの心をくすぐることができます。

○小学2年生の保護者へ

子どもの心には、「ほめられたい」「認められたい」「役立ちたい」という3匹のたいが住んでいます。子どもに触れる、子どもを見る、子どもの話を聴く、子どもに声を掛けることを心掛けて、3匹のたいを大きく育ててください。

○小学3年生の保護者へ

9歳くらいから自分を客観視できるようになります。自分で行動にブレーキをかけられるよう、役割を与えて自分のやりたいことよりも、やるべきことを優先させる練習をしましょう。そして、叱る回数よりも、ほめる回数を増やして自己肯定感を高めましょう。

○小学5年生の保護者へ

一緒に料理を作ることをお勧めします。料理は買い物から片付けまでたくさんの活動あり、見る力、聞く力、想像力、段取りする力が求められます。塩少々、大さじ半分等、曖昧な言葉の意味理解や、共有体験を通して社会性やコミュニケーション能力を楽しみながら高めることもできます。



○中学1年生の保護者へ

人は教えられたことはすぐ忘れますが、自分で気付いたことはなかなか忘れません。自分で気付く、だからやる気になります。やる気になった子どもの伸びしろは無限大です。視覚優位を生かした学びやすい方法を一緒に考えたり、選択肢を与えたりして、やがて自分で気付いて工夫できるようにしましょう。

○中学3年生（不登校）の保護者へ

検査を受けたことは、卒業後の進路を真剣に考えたい、自分を変えたいという本人の強い意思の表れです。変わりたいと思ったときが行動に移すチャンスです。本人の気持ちを大切にしながら、検査結果や定期考査等の客観的な情報を基に、本人が説得ではなく納得して進路決定することを期待しています。

保護者が子どもの見方を変えたことで、子どもが変わったケースがたくさんあります。



とれたて直送便



『手すり』は「ないと困る支援」、「あると便利な支援」

ある小学校では、歩行がやや不安定な児童（肢体不自由特別支援学級在籍）のために、玄関に『手すり』を設置したところ、来校する地域のみなさんにとっても好評だそうです。『手すり』は、歩行不安定な児童には「ないと困る支援」ですが、みんなにとっては「あると便利で、優しくて、役に立つ支援」です。『手すり』は、ユニバーサルデザインの生きた教材になりました。私も靴を履き替える際、思わずアレをつかんでいました（☺）